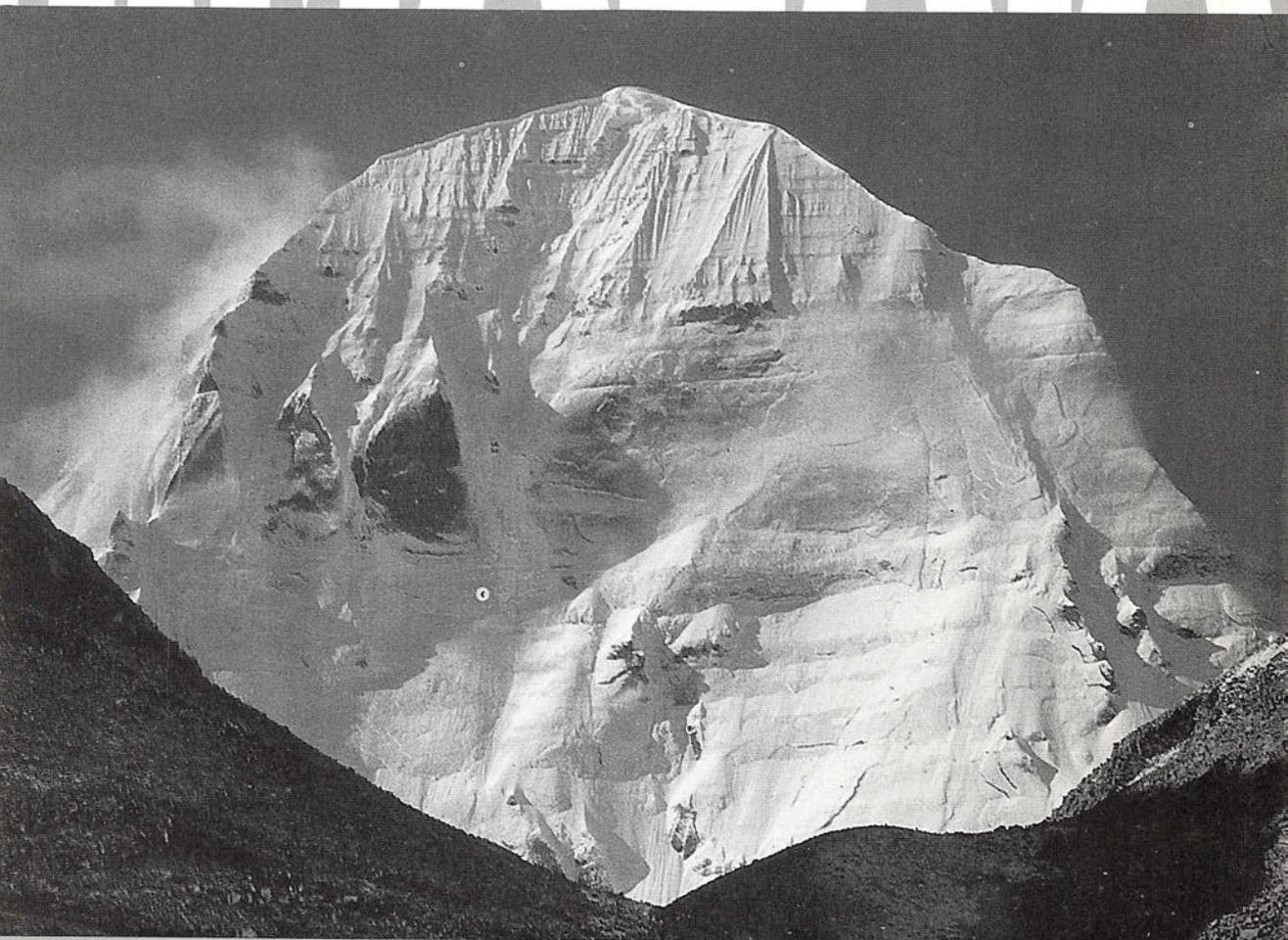


HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 291



1996 FEBRUARY

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

H A J から募集のお知らせ

30周年記念行事

本会は2年後の1997年10月に創立30周年を迎えます。これまでも節目ごとに記念行事が検討されましたが、これまでは諸般の事情で実施されるまでには至っていませんでした。

本年5月27日開催の理事会に於て、30周年記念を迎えるにあたって「A諸外国からのゲストを迎えての行事・式典」、「B H A J 30年誌の発行」、「C 記念野外活動（登山を含む）」の3項目について常務理事会で分担して進行することが決定されました。

現在のところ常務理事会の分担としては、Aを八木原常務理事、Bを山森専務理事、Cを尾形常務理事がそれぞれチーフとなって進めることになりました。

そこで会員の皆様からそれぞれの項目について提案、アイデアを募集致します。特に所定の用紙はありませんのでH A J事務局宛郵送・F A Xでお寄せ下さい。

合同登山隊員

H A Jではチベットと合同登山を協議中です。目標の山については、2～3に絞っていますが、対象は7千メートル以上の山で、あまり登山記録のない山、日本人未登の山、未踏峰です。隊員数など状況が許せば複数の山も考えています。

合同登山は立場の違いを理解してはじめて成り立ちます。今回の合同は特に合同でなくとも許可取得できる山です。

情報の少ない山で異文化の民族との合同登山の実践を希望する真摯な岳人の応募を期待します。

記

1. 登山期間予定：1997年春
2. 場所：中国、チベット自治区ヒマラヤ山脈
3. 個人負担予定額：100万円程度
4. 募集人員：10名
5. 資格：冬山5年以上
6. 申込み先：H A J事務局宛

表紙写真

カン・リンポチェ（サンスクリット語ではカイラスと呼ばれる）は、信仰の山として名高い。中国のチベット自治区西部にあり、カンティセ山脈に属する。

北面はこのように垂直の氷雪壁となっていて、見上げる巡礼者達を魅了する。西面は巨大な岩壁によって支えられており人々を寄せつけない。

南面は、全体に鋭いドーム状をなして、中央部に頂上直下から深い一条の溝が基部に向かって走り、その姿はまさにリングムを彷彿させる。

ヒマラヤ No.291

1. 新連載 中高年？ ヒマラヤ流れ旅(1)

冒険ダン吉に戻りたかった 阿部 淳

4. サトパント登頂

雪と岩の会

15. インド・ヒマラヤを楽しむ(5)

沖 允人

17. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・ヒマラヤから・Books〉

19. OBITUARIES（追悼）

チャールズ・エバンズ氏

20. 中国高峰登山15年小史(10)

山森欣一

24. 寸感・事務局日誌

冒険ダン吉に戻りたかった

阿部 淳

●冒険ダン吉に戻りたかった!

定年退職1年にして、ようやく完全な自由を得た。戦中の抑圧と高度成長の下敷きとして定評ある昭和一桁生まれのサラリーマンにとって“自由”ほど狂喜すべき贈り物はない。これまでの十数回のヒマラヤ行も、企業の夏休暇やリフレッシュ休暇をセコい策略で引き伸ばし、せいぜい10日から2週間のトンボ帰りをしていたから、行く度毎に欲求不満が増長してきていた。それゆえ第二の職場など、ワイフのご機嫌を取りながらも見向きできる筈はなく、ワクワクしながら夢の山の世界を駆けた。

一桁末期は言われる通りの意気地なしとは言え、冒険ダン吉育ちの誇りがあるから、ひとたび使命に燃えれば椰子の孤島でも密林へでも喜んで一人で旅立つ癖がある。それに僕は冒険小説“ヒマラヤの牙”(山中峯太郎、1940S)で幼児洗礼を受けた本物のドキドキ人間だから、悪評高い中年登山者に対する世評も、同僚の筈のセンセイ方も“昔のヴェテランはなお困る”とおっしゃるヤリ球も効き目があろう筈はなかった。いっそ不良中年登山者として昔の冒険ダン吉になりきろうと思うと、もう嬉しくて堪らなくなった。

この40年間、見て聞いて、読んで願って、なお果たせなかった山や峠や氷河湖を描いていくと、それは過ぎ去った昔を取り返さんばかりに果てしなく広がった。今まで中途半端にしてきたネパール、インドのあちらこちら、それに知らぬフリをして行かずじまいだったパキスタンはお詫びも含めて、カラコルムもさる事ながらヒンズーラジなど北西辺境にもお参りしなければならぬし、メモするだけですぐにページを溢れた。こうなると一つ一つの情報を綿密に調べて、計画を立てて準備することなど出来っことなく、ヒマもない。いや、今まで35年間の分刻みのシガラミを捨てる事が発

想の転換を生む筈である。今度は今までとは逆に、お金は乏しいが時間はタププリあるのだから、行ってダメなら引き返して、また行けばよい。ダメなら、替えればよい。それに本音は、旅行ビザが無かった学生の頃から憧れていたヒマラヤ放浪の旅を、どうしても実現せずには済まなかったのである。こうして、ようやくアンリミットの、ヒマラヤ彷徨の流れ旅が生まれることになった。

●体はもうボロボロだった

とはいえ、60年生きて、短命で知られるマスコミ勤めをしているとルンルンだけでは済まなかった。ヒマラヤへの欲求不満はストレスに加えて暴飲、暴食、暴煙の三悪を誘い、10年も前に高血圧症、脂肪肝、糖尿病など典型的な成人病の宣告を受けた。即入院の指示を仕事にかこつけて引き伸ばす間に、13キロ減量して抑え込み、入院だけは免れた。入院により更に酒も煙草も絶たれる事は、内科か精神科かの選択を強いられるだけの事だから当然前者を選んだ。ただ、問題は登山が不安で、次第にブレーキがかかり後回しになっていった事であった。93年11月、退職月に人間ドックの再検査で肺気腫発覚、早いうちに煙草をやめないと肺がボロボロになると驚かされた。ヒマラヤへ行けなくなっては定年の意味もなくなる。1日40本40年続けた煙草を、退職した翌日から断固、絶った(今でもつらいけど)。その少し前、軽い登山の下りで2度膝を痛めており、それは膝靭帯急性損傷とのこと、そのままでは山に登れない。リハビリが必要で、アスレチック・クラブに通ってストレッチと筋トレを始めたが、屋内トラックでのランニングオーバーのせいか、ふくらはぎの“こむらがえし”を頻発して始めからやり直した。予防には頓着ないが矯正と回復には自信がある。さあ、今度は問題の高血圧の退治だ。ただでさえ、60才で

は酸素摂取量60%（対20才）、6,000mでは酸素圧45%になるので、この年代では20才0mの27%しか酸素にありつけない。94年に入って、トレーニングの頻度と密度を高める一方、血圧と脈搏の相関から、運動負荷（ハーハーの度合）に伴う脈搏変化の度合を体で知り、その推測値を得るように心掛けた。通常のリミットを100、マキシマムを120とし、心臓の鼓動自覚で脈搏がオーバーしていないかを推量するインチキ法で制御しつつ、心臓をなだめた。これで登山中に立ち止まって脈搏や血圧を計る煩わしさから解放されると共に突発的な上昇を知覚できるように試みた。次いで現場実験は、40キロ以内の加重にとどめて札幌近郊の日帰り登山で試みる事から始めた。それにより、ネパールでのトレッキングを想定した正味8時間の登降で、脈搏100以内の安全圏の速度をほぼ掴む事ができた。北海道内15回の登山で心臓のトラブルは無かったし（2回の二日酔による息苦しさは別）、膝は無意識のうちにカバーしており、“こむらがえし”ももう起きなかった。一人旅に備えて（シェルパやコックは雇うだろうけど）日赤救急法を習得したが、考えてみればこれは他人に施すものであり、自分の場合は患者が指示する立場になる。

ともあれ総集編として10～11月、わが“えぞ山岳会”のカトマンス集会の折、緊急時の対策要員としてワイフを伴い（内緒）、ムクチナート（3,802m）まで10日間登り降りしたが、やはり二日酔を除いては、登り急がなければ当面大丈夫だという自信を得た。[通常血圧150（165～140）、血糖140～160]

●急がなくなっちゃ！

しかし、新病がいつ出てきても不思議のない体であり、リハビリーとのモグラ叩きを繰り返しながら標高どこまで登れるか？昔“山は逃げない”と教わったが、いま山は日毎に逃げ、ヒマラヤは日毎に高くなる。急がなくなっちゃ！

95年2月退社後の諸手続き・税申告終了、さあ、自由だ、出発だ。今回行きたいところは、ネパールではガネッシュ、ジュガール、それにどうしても西ネパールのカンジロバ山群、ここではカンジェ

ラルワ峰とその氷河湖フォクスンドに対面し、カグマラ峠からジュムラに抜きたい。インドでは静かなダウラダール山脈、ソーランエリア、ガンゴトリ山群巡りの中ではヘランブー・花の谷に寄って、ニルカントとジョオリのBCで亡き友人たちへ追悼を捧げる。パキスタンでは、この度は三大氷河への接近は後回しにして広く見る事を優先させ、ギルギットからチトラルまでのジープ行の途中でヒンズーラジの南面を歩き、西端にヒンズークシュからチトラールへ入りたい。またクンジェラープ峠への途中、カラコルム・ハイウェイ両側の氷河に足を延ばすのも良いし、気が進めば中国国境を越えてウィグルに入るのも悪くはない。またギルギットからナンガパルバートもさる事ながらシャチェン地域に入れるなら最優先させてよい。挙げればキリがないし、気が向けば何処へでも立ち寄れる。このうちドレとドレが実現し、何が加わるか、それは気儘な独り旅ゆえの楽しみである。

行先、行動、時間が決まっていないから、費用の見積りもわからない。1人だと割勘相手がいなくて高くつくからトラベル・スタイルのリストラは当然必要である。それに金庫番は元来苦手なのでキャッシュ1,000\$とT/C4,000\$以外はクレジットカード（AMEX、VISA、MASTER）で対処する事にした。言葉は、一朝にして成る代物ではなく、ヤリクリ・イングリッシュで急場を凌ぐ場数だけは踏んでいるので、今更侮やまず、諦める事にした。

持物の中で、薬品は一人旅ゆえ特に大切に、日常薬を高血圧・糖尿・胆石など最低6ヶ月分、それに膝損傷時用のステッキとサポーターと軟膏も必需品であった。

今回初めて、長旅の伴侶に音楽が必要かと思いつき、急速、2時間テープ8本分を厳選し、録音して持参する事にした。差し迫ってから夢中になり、現地情報検索の予定時間の総てをこれに当ててしまった。

こうして、1年間有効のオープン・チケットを懐に、持ち上げるのが精一杯のキスリングを肩にして、ワクワクしながらわが家を出たのは、ヒマラヤには少し早過ぎる3月2日であった。“冒険ダン吉の出発だーい！”



ガンガの源流を訪ねて

サトパント 1995年

—雪と岩の会サトパント登山隊—



プロローグ

1994年の年末から95年の新春にかけて、我が雪と岩の会は北アルプスの前穂高岳北尾根から明神岳V峰西南稜へのルートで合宿を行った。天候に恵まれて元旦には早くも松本に無事下山した。

我が会は会員の大半が大酒飲みのくせに、いまだに山行中は酒を持参しないと云うおかしなクラブである。尤も飲みだすときりがないので持っていけないだけなのであるが……。

山で飲めない分、下ってからが大変である。その時も下山して元旦の松本で例によって散々飲んだ。飲んだ勢いで、どうも私は“ウン”と言ったらしい。

1月4日に電話が鳴って、「サトパントの話はほんとうなんでしょうね。準備にかかっているんですね！」と言われて、何の話か判らなかつた。良く聞いてみると、酔った勢いでまた雪と岩の会でヒマラヤへ行こう、と云う事になつたらしい。

酔った上とはいえ、どうもそうならしいので、翌5日にインド登山財団（IMF）にファックスを送って登山許可を打診した。すると翌日に8月15日～9月15日の登山期間なら許可出来ると言う返事が送られてきた。我々の希望した9月中旬から10月中旬の期間は既にフランス隊によってブッキングされていた。1ヶ月早い時期ではあったが、取り敢えずブッキングすることにした。すると9日には我々のサトパントの仮登山許可がファックスで送られてきた。僅か4日間で登山申請が出来てしまうのであるから便利になつたものである。

こうして我々のサトパント登山計画はスタートした。我が雪と岩の会は1961年（昭和36年）の創立であるから今年で34年を迎える。40年代から50年代の隆盛期には単一山岳会で8,000m峰登山を標榜し、1974年にツクチュ・ピーク（6,920m）、1978年にヒマルチュリ（7,893m）と登山隊を送ってきた。83年にはインドのガルワール・ヒマラヤで消息を絶つた仲間を求めてナンダ・カート（6,

611m)へも出掛けた。しかし、その隆盛も50年代までで、その後は凋落の一途を辿り、最近では4~5名で正月合宿へ出掛けるような寂しい現状である。会員の平均年齢も高くなった。二十歳代でツクチュ・ピークへ出掛けた仲間も四捨五入すると50の大台に載るようになった。こんな仲間達ともう一度ヒマラヤへ行ってみようと思ったのは、酒の勢いばかりではなかった。かけがえのないカメラードと楽しい山登りをヒマラヤに求めたのである。

出発準備

こうしてIMFから登山許可の内諾を得た後、早速、登山料を払い込み、計画は実現に向けて動きだした。

計画の発端が酒の勢いで決まった、と言う事もあるが、冷静に判断すると参加が難しいメンバーも現れ、最終的にメンバーは尾形好雄(47)、宮崎久夫(45)、岩崎洋(35)、安藤義則(30)の4名となった。平均年齢39.25歳である。

遠征期間は、成田を出発してから成田に戻る迄36日間とした。ベース・キャンプから上の登山活動日数は、余裕を持って22日間取った。予定通り順調に進めばBC建設後、16日間で登れるタクティクスである。残り6日間は予備日数とした。これだけ余裕を持った日数であれば、間違えなく全員が登れるであろうと考えたのだが、そう上手くいかないのが山登りである…。

休暇の都合で登山隊には参加出来ないが、聖地ガンゴトリを訪れてみたいと言う者を対象に“聖地巡礼”のトレッキング隊を募ったところ11名の参加者を得た。このトレッキング隊は出発から帰国まで12日間の日程とした。

このトレッキング隊の同行によって、我々は登山隊荷の大半を手持ちで持ち込むことが出来た。フィックスド・ロープとスノー・バーなど若干の荷物は、HAJヌン隊の好意によって彼らの別送品と一緒に運んで貰った。

隊荷輸送で一番頭を悩ますガス・カートリッジについては、まず燃料計画でC1までガソリン・コンロを使う事にして、使用本数を少なくした。そして必要な24本のガス・カートリッジはイスラ

▼ガンゴトリ寺院



マバードで入手して陸路デリーへ運んだ。岩崎隊員は6月~7月にかけてパキスタンのティリッチ・ミール登山に出掛けており、登山終了後、イスラマバードでアイス・ピトンやガス・カートリッジをかき集めて運んで来て呉れたのである。

食糧も上部キャンプ用に若干の日本食を用意しただけで、殆どの食糧は現地調達とした。

こうして「ガマンすれば登れる」をスローガンとした我々の登山隊は、聖地ガンゴトリを目指して出発した。

聖地ガンゴトリを目指して

インドは大きな国である。北辺の中国・チベットとの国境をなすヒマラヤ山脈から赤道近くのカニヤクマーリ(コモリン)岬にいたる広大な大地は、まさにサブ・コンチネントである。

このインド亜大陸の北部を北西から南東に貫流してベンガル湾に注ぐのが、ガンジス河である。インドの母なるガンジス河をインドの人達は、親しみを込めて「ガンガ」と呼ぶ。インドの人口約9億のうちおよそ83%を占めるヒンズー教徒にとってガンガは神そのものであり、ガンガに生き、ガンガに死ぬことこそ、その理想とされ、生活と信仰の柱となしている。

全長2500キロ余の万里行をなすガンガの源流は、ウツタル・プラデシュ州の西部ガルワール・ヒマラヤに横たわるガンゴトリ氷河の舌端、ゴウムク(聖牛の口の意)からほとばしる。この神の河の源流域はヒンズー教徒の聖なる地として古来より崇められてきた。

今回我々が目指したサトパント峰(7,075m)は、この聖なる地に大斧の刃を天に向けたような

特徴ある梯形をなして聳える。

15年前、ガンゴトリ・エリアが外国人にオープンされた翌年、私はH A Jの登山学校隊を率いてケダルナート・ドームの登山にこの地を訪れた。あれ以来の再訪である。

*

8月17日、先発隊として安藤が成田を出発し、この日の早朝にパキスタンからデリー入りした岩崎と合流する。

先発隊の二人は18日～20日の3日間でデリーでの出発準備に奔走し、全ての準備を整えて本隊を迎えてくれた。

8月20日、尾形、宮崎の本隊とトレッキング隊11名が成田を出発する。

久し振りに搭乗したエア・インディアの機内サービスはリキュール類がフリーになっており、驚かされた。

搭乗機はほぼ定刻通りにデリーのインディラ・ガンジー国際空港に到着。旧知のフカム・シンがイミグレーションの中までレーを持って出迎えてくれた。我々の出迎えのため、前日にラダックから戻ってきた、と言う。かれの義理固さにはほんとうに頭が下がる。

空港税関でビデオ・カメラを申告しようとしたら、申告は不要と言われる。これまではパスポートにT.B.R.E. (Tourist Baggage Re-Export) を書かれ、出国時にその物品を持ち出さないと、そこに書かれた金額を罰金として支払わなければならない。大きな進歩である。

山ほどの荷物もフリー・チェックで税関を通過し、岩崎、安藤の先発隊と合流する。

空港からシカール社のバスでホテルに向かう。ホテルに着くと、我が隊のリエゾン・オフィサー、アビジェート・ソワニ (27) さんが待っていてくれた。今回のL・Oは民間病院の救急医療の女医さんである。早速、個人装備のチェックをして貰い、明日デリーを出発して山に向かう事を了承して頂く。

手持ちで運んだ隊荷の再梱包などで、遅い夕食となったが、何とか翌日に出発出来るメドがたった。

8月21日、日体大使館を表敬したあと、IMF

に向かい、L・Oとのブリーフィングに臨む。一連の契約書にサインをした後、L・Oの保険手続きで終わりの筈が、事務局長のサインで揉める。新しい事務局長のB.K.D.Badgel大佐は、余りIMFに顔を出さないようで、IMFの事務処理は滞っていた。我々の書類にも事務局長のサインが必要だと言う。結局、我々が昼食を取っている間にIMFのスタッフが事務局長の家に行ってサインを貰ってくることになる。インドらしいお役所仕事である。

このお陰でデリーの出発はすっかり遅くなり、15時近くになって漸く発車することが出来た。

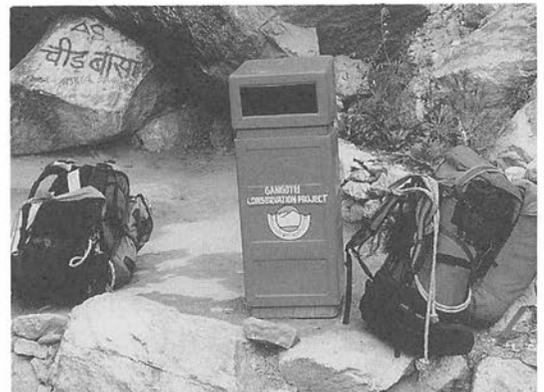
インドの8月はセカンド・サマーの真っ只中で、焦熱地獄のような暑さであった。この暑さから逃れるように、ガンガの源流を目指して車を走らせた。

毎度のことながらインドの運転手には肝を冷やされる。クラクションは鳴らさず、反対車線をライトをパッシングしながら対向車にも構わず、無理な追い越しをかけるなど、寿命が縮まってしまう。道路の側に事故でメチャメチャになった車を見ると、さもありませんと思われる。

ニューデリーから北東へ約270キロで、リシケシに着く。デリーを出たのが遅かったこともあって到着したのは21時45分と遅い時間となった。

ドライ・エリア (禁酒地帯) のため、こっそりウイスキーを頂戴しながら、遅い夕食を摂って就寝。

8月22日、夜中に屋根を打つ激しい雨音で目を覚ます。その凄まじい豪雨は、まるで瀑心をかぶったような音であった。この先の道路事情が気にかかった。



▲設置されたゴミ箱

▼ツーリストロッジの増えたボジュバス



リシュケシから先はバギラティ河から離れて山道を辿るようになる。重畳と連なる山々の山腹をくねくねと曲がりくねったバス道が延々と続く。谷を隔てた向こう側には耕して天に通じる式の千枚田がびっしりと斜面に重なっている。やがて山相が険しくなってくると、ヘアピンの道を喘ぎながら上がってゆくようになる。谷側の崖は切り立ち、遙か下方にはモンスーンの雨で増水した濁流が凄い勢いで流れており、思わず山側の座席に身を寄せたくなる。

やがて谷が急に広く開け、人家が密集したところに出るとウツタルカシである。リシュケシから高度にして800m程上がるため、平野部の酷暑からは解放される。

バザールの外れにあるツーリスト・ロッジに投宿した。驚いた事に、我々の宿の前に「サティアン」と書かれたホテルがあった。連絡官にサティアンの意味を尋ねると、彼女は「Turth」（真理）と答えた。オウムのお陰で日本では別な意味のサティアンが定着しそうである。

午後、連絡官と二人で地区行政長官、警察署、外国人登録部門、ネルー登山学校などを表敬し、IMFからの手紙を提出して、万が一の場合の便宜供与を依頼した。

8月23日、昨夜も前日同様激しい雨音で目を覚ます。今日からの山岳道路が益々気に懸かってくる。

案の定、ウツタルカシから小1時間程行った所で、土砂崩れのため道路がクローズされ、車が長蛇の列をなしていた。道路人夫が狩り出され、人海戦術で土砂を取り除いていた。ブルトザーなどの機械力を使うわけでないから全ての土砂を取り除くわけではない。車1台が辛うじて通れる分だけ除くと通すのである。インドには道路管理責任などないのであろう。日本では考えられない事である。

ガンガニの温泉を過ぎ、さらにバギラティ河の深いV字峡谷を俯瞰しながら先へと進むと、ダブラニの手前で、モンスーンの雨の恐ろしい痕跡を眺める事が出来る。

1978年、この地で未曾有の大崩壊が起こったのである。対岸の山頂付近から起こった巨大な規模

の土砂崩れによって、バギラティ河が1.5キロにわたって埋まり、バギラティ河の流れが堰止められてしまったのである。このためバギラティ河の水は3日間にわたって止まったと言われる。15年前に訪れた時は、この大崩壊の2年後であったため生々しい爪痕であったが、15年の歳月で押し出された土砂には木々の緑が見られるようになっていた。ダブラニの手前の流れに埋没した鉄橋は、まだ僅かにその上部を川面に覗かせ、なごりを留めていた。

ダブラニで橋を渡ると、今度は右岸をぐんぐん高度を稼ぐようになる。途中の山腹にはたわわに実ったりんご畠があり、早速、りんごの売買交渉をする。

再び高度を下げて対岸に渡ると、谷はひらけU字谷状を呈してくる。やがてこの辺り最大の軍事基地のあるハルシルに着く。

ハルシルの先、ランカとパイロンガティは指呼の距離にあるが、右岸よりジャルガンガの深いゴルジュが注入するため寸断されている。15年前はこの間に橋が無く、切り立った崖をジグザクに下までおりきり、対岸に渡ってまたジグザグに同じ高さまで登らなければならなかった。現在はこの目が眩むようなゴルジュに立派な橋が架けられており、ものの数分で渡る事が出来るようになった。

15年前に無かった橋を歩いて渡ってみるとことにした。ところが、バスから降りだした途端、橋の袂の監視所から警備兵が飛んできた。歩行での通行は駄目だと言う。写真を撮らない約束でなんとか目を瞑ってもらった。橋の上から見下ろす大ゴルジュの景観は圧巻である。それにしてもよくこれだけ橋を架けたものだと感心させられた。

バイロンガティを過ぎると、ガンゴトリは間もなくである。

15年前に比べると随分ツーリスト・ロッジが増えたのには驚かされた。我々は橋を渡って、滝を正面に見れるツーリスト・ロッジに投宿する。ガンゴトリⅢ峰に向かうインド隊と同宿であった。

8月24日、ガンゴトリから先はいよいよ徒歩によるトレッキングとなる。隊荷輸送はポーターに委ねられる。この辺りのポーターは、地元のガルワリー・ポーターの他、西ネパールからの出稼ぎポーターも多い。

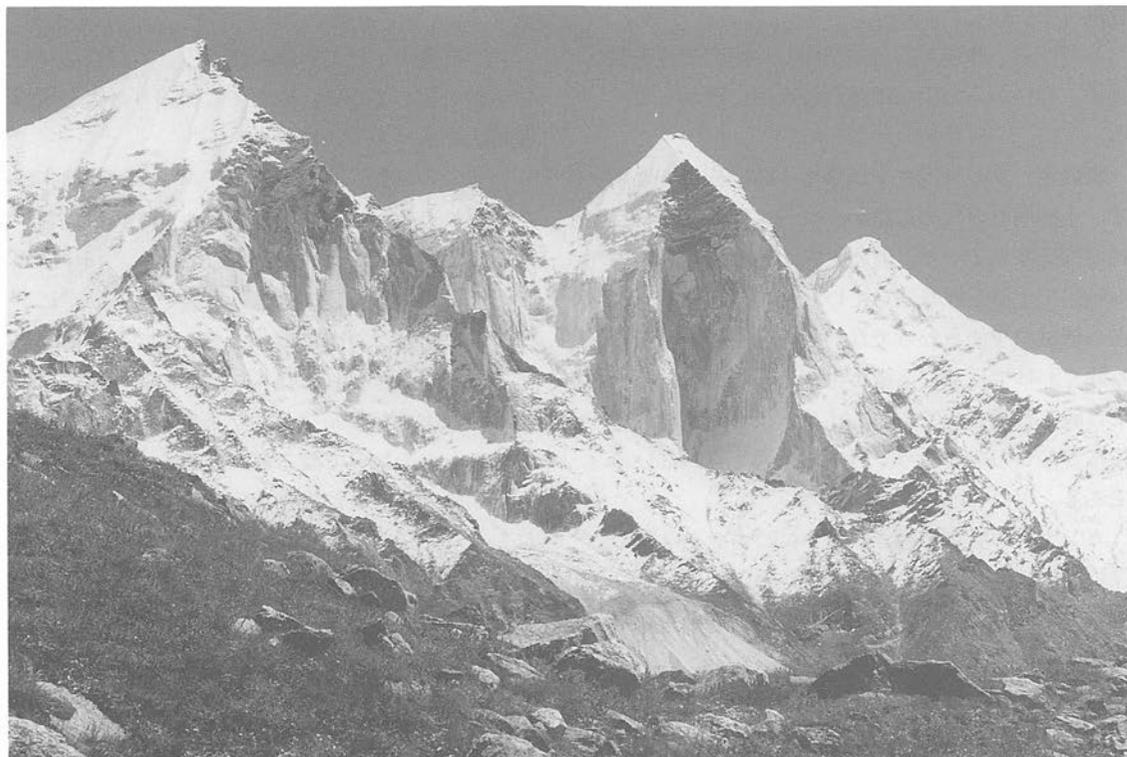
25キロの荷物を1日担いで85ルピー（250円）15年前、15ルピー程であったから、5.7倍の値上げになるが、15年前は1ルピーが30円であったので、円換算すると450円となる。これだけの値上がりしながら15年後の現在の方が円換算では安いのである、円の強まりは、我々ヒマラヤ登山の大スポンサーと言える。

ガンゴトリの巡礼シーズンは、5月～6月と9月～10月にかけて大勢訪れる。我々が訪れた時期は、まだモンスーンの最中のためそれほど多くは無かったが、夏暑いラジャスタンからの巡礼が目立った。

ガンゴトリからガンガの激流ゴウムクまでは約20キロの行程である。その道々は巡礼路だけあって良く整備されており、馬や籠での巡礼も可能にしている。

再び懐かしい巡礼路を辿って感じたことは、道筋に茶店が増えた事と、プラスチック製のゴミ箱が至る所に設置された事である。このゴミ箱は、1993年インドに本部のあるH E T（Himalayan Enviroment Trust）の「ガンゴトリ環境保存計画」の一環として設置された。どのゴミ箱もゴミで溢れていないところをみると定期的に回収されているのであろうか、それとも利用されていないのであろうか。どちらにせよ、かつて日本の山にもゴミ籠が設置され、ゴミを回収しないものだからそのままゴミの山になってしまい、結局またゴミ籠を撤去してしまうことがあった。この聖なるガンゴトリでそれが繰り返されないことを祈りたいものである。

トレッキング隊と一緒にいるため、ガンゴトリからチルバスまで4～5時間のノンビリしたペースで進む。チルバスを過ぎると徐々に高度の影響が現れ始め、ペースはさらに遅れ気味になる。午後3時頃三々五々つれだつてこの日の泊まり場ボジュ



▲タポバンから見るバギラティ三山

バスに着く。

ボジュバスとは、「ボー・ジュパットゥールと呼ばれる岳樺が生える場所」を意味する。昔はこの樹皮をエジプトのパピルスのように紙として使ったり、経木として使ったりして重宝がられたと言われる。しかし、現在では僅かに数本の岳樺が残されているだけである。

15年前はラル・ババのアシュラム（修行道場兼巡礼宿）が一軒だけであったが、今では随分と多くのツーリスト・ロッジが建てられている。

現在、ここには6月～10月にかけて無線局が開局されており、登山隊の緊急時などには利用できる。

8月25日、昨夜も激しい雨に見舞われ、夢うつつにポットン、ポットンという雨音を聞いていたら、何と屋根が雨漏れしていてシュラフを濡らしてしまう。

宮崎と岩崎はポーターと共に予定通りナンダンバンに向かい、尾形と安藤はトレッキング隊と一緒にゴウムク迄出掛ける。

森林限界のボジュバスから6キロほど溯った所がゴウムクである。チャウカンバ山塊を源頭にした全長30キロに及ぶガンゴトリの舌端である。この聖牛（ゴウ）の口（ムク）を意味する氷窟からガンガの一滴、というよりは何万滴と言う濁流がほとばしり、ベンガル湾までの万里行が始まるのである。

ゴウムクの崩壊は年々進んでいる様子で、15年前に比べるとかなり後退したように思われた。

今年の5月、日本などの援助によってボジュバスに氷河調査基地が設置された。ここで周辺の氷河調査をされているヒクマツ・シン（26）さんの話では、毎年15m位の割合で後退していると言う。そうすると15年で225mほど後退したことになる。

インド全土からこの聖なるガンガの源流を訪れた巡礼者は、氷混じりの凍てつくような水で沐浴し、この聖水を持ち帰る。この水は単にガンガ・パニ（水）とは言わず、「ガンガ・ジャル」と呼ばれて崇められている。彼らにとってこの聖水は、罪障を浄め、輪廻からの解脱をなしえる命の水なのである。

この日ゴウムクに戻るとさらに何人かのトレッキング隊メンバーがダウンする。明日は予定を変更してガンゴトリへ下ることにする。

8月26日、宮崎と岩崎は予定通り、ポーターを連れてナンダンバンからヴァスキ・タールに向かい、ベース・キャンプ（4,850m）を建設する。

尾形はトレッキング隊に同行してガンゴトリに下り、安藤はボジュバスに滞在する。

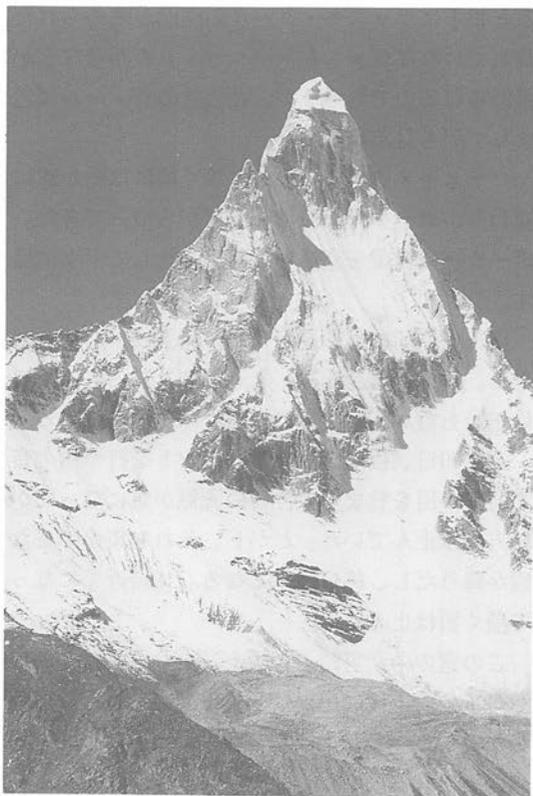
8月27日、BCの二人は休養がてら隊荷の整理などを行い、ボジュバスの安藤はタポバンまで順化トレーニングに出掛ける。

ガンゴトリの尾形は、トレッキング隊を見送った後、ポーター10名を連れてボジュバスに戻る。丁度、バギラティII峰に向かう韓国隊とバッティングしてポーター集めに苦勞する。

登山活動開始

8月28日、BCの宮崎と岩崎は二人の高所ポーター（H・P）と一緒にC1への荷上げを開始し、この日は45kgの荷がC1にあがった。

ボジュバスからは尾形と安藤が10名のポーターと共にナンダンバンに移動する。ゴウムクの氷崖



からモレーン・カバーされたガンゴトリ氷河に上がるところは、右岸からの落石が脅威である。ポーターを走らせるようにして通過させる。

氷河上を暫く行くと韓国隊のポーターが一人倒れており、水と菓を与える。てっきり下るものと思っていたら、後ほどお金を貰いにナンダンバンまで上がってきたのには驚かされた。現金な者である。我が方のキッチン・ボーイはナンダンバンの手前で転んで打撲するも大したケガでなくて助かった。

8月29日、この日もBCの宮崎と岩崎はH・P二人とC1の荷上げに出掛ける。

ナンダンバンの尾形と安藤は、朝食後キッチン・スタッフ、ポーターを残して一足先に出発してBCに向かう。

チャトランギ氷河左岸のモレーン稜上を進む。上から見るとアブレーション・ヴァレーの中にも一条のトレールが眺められる。1時間半ほどモレーン稜を詰めた後、サイド・モレーンをトラバースしてバギラティII峰の北面に入る枝氷河を横切る。古いケルンに何度か騙されながら氷河を横切って対岸に渡り、ボロボロのサイド・モレーンを上がると眼下にヴァスキ・タールの湖面が眺められた。晴れていればヴァスキ・パルバットの西壁などが眺められるのであろうが、乳白色のヴェールに包まれて何も見えなかった。

ヴァスキ・タールのBCに着く頃には雨が雪に変わり、ポーターたちは震えながらやってきた。ポーターに賃金を支払い、手紙を託して早々に帰す。

正午少し前に宮崎達がC1の荷上げから戻ってきた。早速、再会を祝して酒盛りとなる。この日は午後雪が降り続きBC付近は真っ白になる。

8月30日、夜半チリチリとテントを打つ雪の音で何度か目を覚ます。今日の天気気が気になったが朝方には止んでいた。しかし、それも束の間また雪が降りだし、終日降雪となる。19時近くになって漸く雪は止んだ。

この雪の中、宮崎、岩崎とH・P2名はこの日もC1の荷上げに出掛け、正午前にはBCに帰着した。C1への荷上げ隊が戻った後、BC開きの酒盛りをする。

▼埋没したアイゼンを探す



8月31日、久々に快晴の朝を迎える。今日はいぞと思う束の間、とんだトラブルが起こる。朝食前にL・Oが来て、昨夜ポーターがテントのファスナーを開けた、との事。私は医師だから具合が悪いのかと思ったらそうではなかった。これでは恐ろしくてここに居れないのでデリーに戻る、と言う。誰もBCでそんな騒ぎに気づいておらず、どんな事態だったかも知らないが、彼女の下山の意志が固いので、コックのプサンを付けて下らせることにする。H・Pの方は即刻クビにして帰させた。それにしても困ったものである。長い遠征経験で初めてのケースである。

このゴタゴタで出発が遅れたが、尾形、安藤とH・P1人でC1の荷上げに向かう。

BC建設以来初めての快晴で、周辺の花々が良く観察することができ、サトパントの全容も初めて眺める事が出来た。

9月1日、安藤の体調がいま一つなので、キッチン・ボーイを付けてボジュバスへ下ろすことにする。

尾形、宮崎、岩崎は安藤を見送ってから、視界の悪い中をC1に移動する。氷河上はラッセルを強いられる。雪降る中、2張りのテントを設営してC1(5,100m)を建設する。

9月2日、昨夜もチリチリとテントを打つ音が気になって、何度か目を覚ます。朝食後、出発する頃にはどうにか止んだものの、日中も結晶の小さな雪が降り続いた。

尾形、宮崎、岩崎の3人でC2へのルート工作に向かう。目前の氷河は問題ないように思われたが、一歩足を踏み入れるとクレバスが錯綜しており、右に左へ迂回を余儀なくされる。その上、こ

こ数日來の降雪によって膝上位のラッセルを強いられて、遅々としてペースが上がらず苦勞した。

ヒドン・クレバスが縦横に走る氷河のほぼ中央を突破してセラック帯に入る。セラック帯に入って5ピッチルートを延ばしたところで、アイス・ピトンが無くなり、この日は此処までとする。あと2ピッチ程で顕著な大岩へは抜けられそうに思われた。帰路は氷河の右岸沿いにルートを取って一気にC1まで下った。

9月3日、この日も一日中嫌らしい雪が降り続いた。雪が降り続く上、視界も悪く、出掛けるのが億劫であったが、3人でルート工作に向かう。前日のトレールのせいで1時間半程でセラック帯のフィクスト・ロープの開始点に着く。前日ルート工作した5ピッチ目をショート・カット・ルートに変更して終了点に着く。

デポ品を回収した後、1.5ピッチルートを延ばして大岩に出る。そこからさらに4ピッチ雪壁にルートを延ばしたが、余りにも雪の状態が悪いので、それ以上のルート工作を断念して下降する。大岩に登攀用具をデポしてC1に戻る。それにしても酷い降雪である。

9月4日、終日降雪のため動きがとれず、C1停滞。テントの回りを除雪してもまた直ぐに積もってしまうような大雪に見舞われる。高度計の針はC1入りした時に比べて50mも高く指示していた。

9月5日、前日から降り続いている重い雪は、ついにH・P用テントのポールを折ってしまった。テント周辺の積雪は既に1m以上越えており、除雪の捨て場に困るようになる。

相変わらず雪はシンシンと降り続いていたが、C1の食糧も底をつきそうなので、H・PにBCから荷上げて貰うことにする。C1からは尾形と宮崎がH・Pの荷物を途中で受け取るべく、逆ボッカに下る。視界が200m程の中を膝上までの重いラッセルを強いられながら氷河上を下る。ヴァスキ・パルバットの東壁からは雪崩のオン・パレードである。すっかりスノー・カバーされ様相が一変した氷河上を右往左往させられながら、結局、3時間程かかって漸くH・Pのデポ品を見つける。回収してC1へ登り返すも、往路のトレースは雪でかき消され、またラッセルのアルバイトを強い

られた。C1へ戻ったのは午後3時になっていた。デポ品の回収に6時間も費やされたのである。

視界が悪かったため、サングラスを外して行動していた尾形は雪盲になる。

9月6日、高度計の針が徐々に下がり始め、時々薄日が射すようになったものの、雪が降り続く。この日もC1で停滞。

9月7日、朝7時の定時交信で、BCの石油もついに底をついたので、C1のガソリン・コンロ(スベア123)を1台BCに降ろしてほしいとの連絡が入る。C1のコンロも調子が悪いので、1台降ろすことは躊躇われたが、止む終えず降ろすことにした。

安藤とH・PがBCからC1に向かい、C1からは宮崎と岩崎が途中まで下ることにする。合流後、安藤はそのままC1に移動することにした。

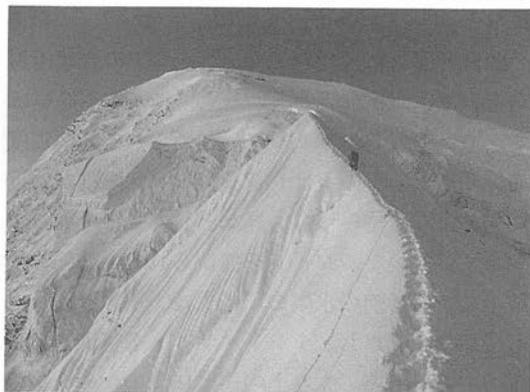
皮肉にも、コンロを1台降ろした後、C1のコンロが調子悪くなる。

この日は、朝から高度計の針が少しづつ下がりはじめ、漸く好天の兆しが見えはじめてくる。

9月8日、前夜就寝前に煌々たる月が顔をだし、いよいよ好機到来かと思われたが、朝になると前日迄と変わらず、鉛色の空からシンシンと雪が舞う。この日もC1で停滞となり、暇潰しにコンロを治そうとあれこれいじくっている内、スベア123はついに使用不能となる。

9月9日、朝、9日振りに快晴に見舞われる。宮崎と岩崎は入山以来初めて自分たちが登るサトパントの全容を眺めることが出来た。BC建設以来実に2週間振りのことである。

尾形、宮崎、岩崎、安藤の4人で、すっかり様相の変わった氷河上をアンザイレンして慎重に進



▼北稜上からC1（氷河上）方向を俯瞰する



み、セラック帯を目指して登る。2時間15分程で、フィックスド・ロープが始まる地点に到着。余りの積雪の深さに唖然とさせられる。フィックスド・ロープは2m近い雪の下に埋まり、その末端にデポして置いたアイゼンを掘り起こすのに2時間半もかかってしまった。

9月2日～3日にかけてルート工作したフィックスド・ロープは全て深い雪に埋まって使用出来ず。やむなく登攀用具をデポした大岩の基部までスタックでラッセルして到達し、帰路新しく3本のフィックスド・ロープを施す。

9月10日、朝起きたら一寸先が見えないような乳白色の深いベールに包まれており、天候が良いのか悪いのか判らなかったが、6時にC1を出発してC2へのルート工作に向かう。セラック帯の手前辺りから濃霧も晴だし、青空が見られるようになる。

前日到達した大岩のデポ地から全ての登攀用具を担いで、北稜に突き上げる雪壁にルートを延ばす。モナカ雪のラッセルに苦しめられて急な雪壁を越えると、その上はシャーベット状の雪が両足に鉛のように絡みつき、遅々としてスピードは上がらず、酷いアルバイトを強いられる。結局、北稜上のコル手前の氷崖の所をC2（5,800m）として荷物をデポし、テント・サイトを整地してC1へ戻る。帰路、大岩上の雪壁に念のため3本の

フィックスド・ロープを施す。

9月11日、尾形と岩崎は、宮崎、安藤のサポートを受けて、C2へ移動する。トレールが凍っていて歩く易く、前日のアルバイトが嘘のようにC1からC2まで3時間ほどで到達する。

9月12日、この日の朝もC2下方は真っ黒い雲に覆われて見えず、前日同様ハッキリしない天候であったが、尾形、岩崎でC3へのルート工作に向かう。

C2から北稜上のコルに出るまでは、モナカ雪の斜面で嫌らしいところである。北稜に出れば稜通しに難なく行けるのかと思っていたら、途中大きなクレバスが2箇所口を開けており、どちらも右から捲く。

尾根がだんだん細くなり、やがて北稜ルートの核心部と言われるナイフ・エッジが現れる。雪が柔らかく、一歩踏み出すと稜が膨れるような感じを受ける非常に不安定な雪質に神経がすり減らされる。持参した10本のフィックスド・ロープを使い切ってもナイフ・エッジを抜ききれず、あと2本ほど必要になる。この日はここまでにしてC2に戻る。

ナイフ・エッジのルート工作のメドもついたので、翌日はC2から一気に頂上アタックを試みる事にする。C2から頂上迄の高度差1275m、最終到達高度7,075m、十分に可能性はある。

▼頂上稜線のトラバース



頂上アタック

9月13日、2時起床、3時食事、4時出発のコースで尾形と岩崎はC2を出発して頂上に向かう。ヘッド・ランプも要らないほど煌々と照る月明かりの中、前日のトレールを辿る。

1時間10分でナイフ・エッジのフィクスト・ロープのところに着く。そこから10ピッチ、フィクスト・ロープを辿って前日の最高到達点に達し、さらに1ピッチルートを延ばしたところで7時の定時交信となる。

この日はこれ迄にない絶好のアタック日和に見舞われ、隠れていた周辺の山々が漸くその全容を現してくれた。これまでの鬱憤を晴らすかのように写真を撮りまくる。稜上ではブロッケン現象や美しいダイヤモンド・ダストなども見る事が出来た。

交信後、さらにもう1ピッチルートを延ばすとナイフ・エッジは終わった。フィクスト・ロープの終了点に、邪魔になるハーネスなどの登攀用具をデポする。ところが30m程雪壁を直上すると大きなクレバスに行く手を阻まれる。右往左往した後、ロープを持たない我々はこのクレバスの右端までトラバースしてそっとこのクレバスを乗り越えた。

このクレバスを越えると頂上までは、果てし無

い冗長な雪の斜面が続く。我々の場合、それが延々5時間ものラッセルであった。

この長い長い雪面から解放された後、頂上稜線に張り出した雪底の小さいところから乗越して、頂上の一角に立つ。頂上稜線の一番高い所は左端のスノー・ドームと聞いていたので、稜線を25分程辿って頂上稜線の左端まで行く。登頂時間は13時34分であった。午後になって雲が湧き出し、我々が頂上に立った時は既に雲の中となり、残念ながら頂上からの眺望は得られなかった。

頂上に25分程いたあと下山にかかる。流石に下りは早い。下降途中、一寸先見えない深い濃霧のために何度か時間待ちを強いられながらも、頂上からC2まで2時間50分で無地帰着した。

9月14日、第2次アタック隊として宮崎、安藤の二人がC2から頂上に向かう。前日同様の月明かりの中を午前3時にC2を出発する。山頂付近には雲一つ無く、前日よりも絶好のアタック日和に思われた。

ところが、思わぬところに落とし穴が待ち構えていた。7時30分頃6,300m付近で板状表層雪崩に巻き込まれて流されたのである。二人ともかうじて雪崩の本流からはじき出されて九死に一生を得た。前日の軟雪が夜間の放射冷却によって表面層だけが堅雪化し、その板状に踏み込んだために雪崩を誘発したらしい。

二人とも雪崩のショックが大きく、登頂は断念してC2に戻る。

明日、C2を撤収してBCへ下ることにし、午後はテントでノンビリしていたら、14時頃より空模様がおかしくなり、15時には横なぐりの降雪となった。新雪が降り積もるとC2下の雪壁が下れなくなるので、直ちにC2を撤収して下ことにする。激しい降雪の中、C2を撤収して下山にかかったが、下り初めて暫くすると薄日が射すようになって、天候は回復した。なんだかキツネにつままれたような不思議な天候であった。

途中のフィクスト・ロープを全て回収してC1に戻ったのは19時であった。実に長い1日であった。

9月15日、テントに陽が当たってからC1の撤収にかかり、11時過ぎにいつもの撤収のような山ほどの荷物を担いでBCに下る。

15日間振りにヴァスキ・タールのBCに戻り、ともかく我々のサトパントは無事に終了した。

エピソード

頂上に登らせるべく二人が登れず、登らなくてもいいほうが登ってしまった。そう言う意味では

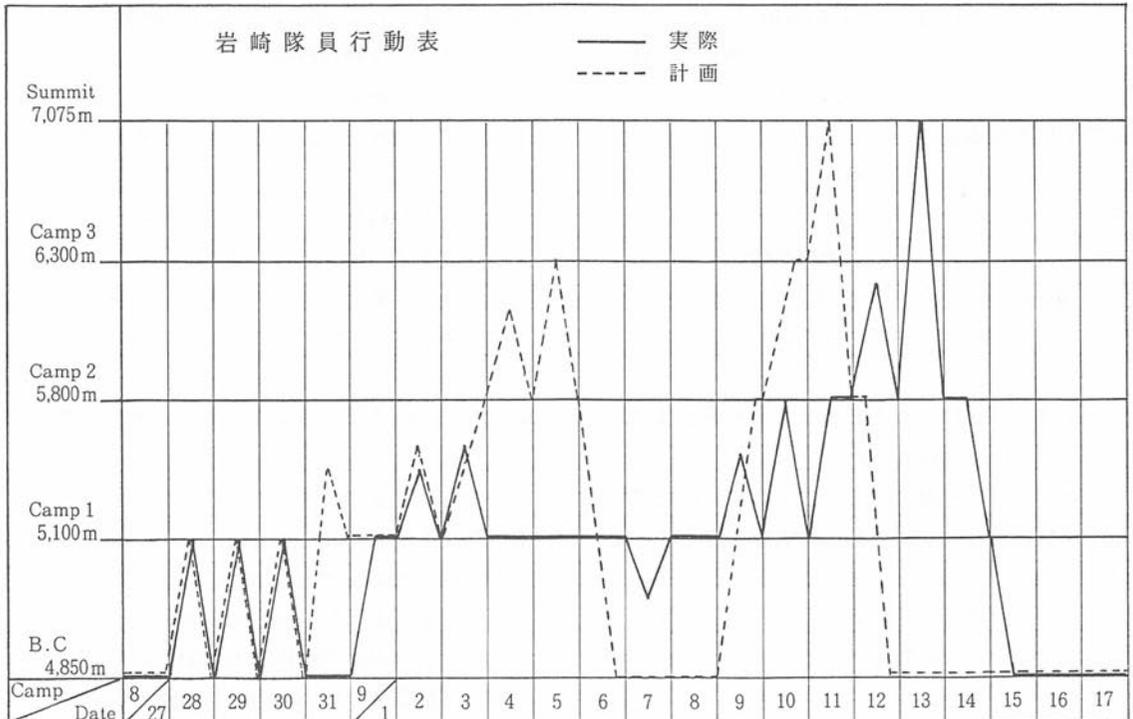
▼頂上に立つ筆者



失敗の登山であった。しかし、こう言う考えそのものが山にたいしてどれだけ不遜な事か、身にしみて味わった。今回は辛うじて助けて貰ったが、いつもそう旨くいくとは限らない。山はいつも登山者のスキを見ている事を忘れてはならない。

雪崩から九死に一生を得た二人は、登山が終わってから約一か月インド、ネパールの仏跡巡礼に出掛けた。

(尾形好雄 記)



インド・ヒマラヤを楽しむ(5) 一般的注意事項等については第1回の「はじめに」の項を参照。

その5 マナリからレーへ

推奨期間：7月下旬から9月中旬

概算費用：約1280ドル

参考日程：デリー発、デリー帰着。10日間。

第1日：デリー滞在

デリーで出発準備。その夜はデリーのホテルに泊る。

第2日：デリーからマナリへ（空路と車）

早朝にデリーを空路で出発し、チャンディガール(Chandigarh)着。チャンディガールを車で出発し、途中で昼食をとり、標高約1,920mのマナリ(Manali)に午後着。マナリのホテル泊まり。

第3日：マナリ滞在

マナリの近くにあるドーンガリ・デヴィ寺院(Dhongari Devi)、ヴァシシュトの温泉(Vashisht Bath)、ジャガック（Jagatsukh）などの観光地を訪ねる。マナリのホテル泊まり。

第4日：マナリからジスパへ（ジープ）

朝食後、ジープでジスパ(Jispa)へ出発。

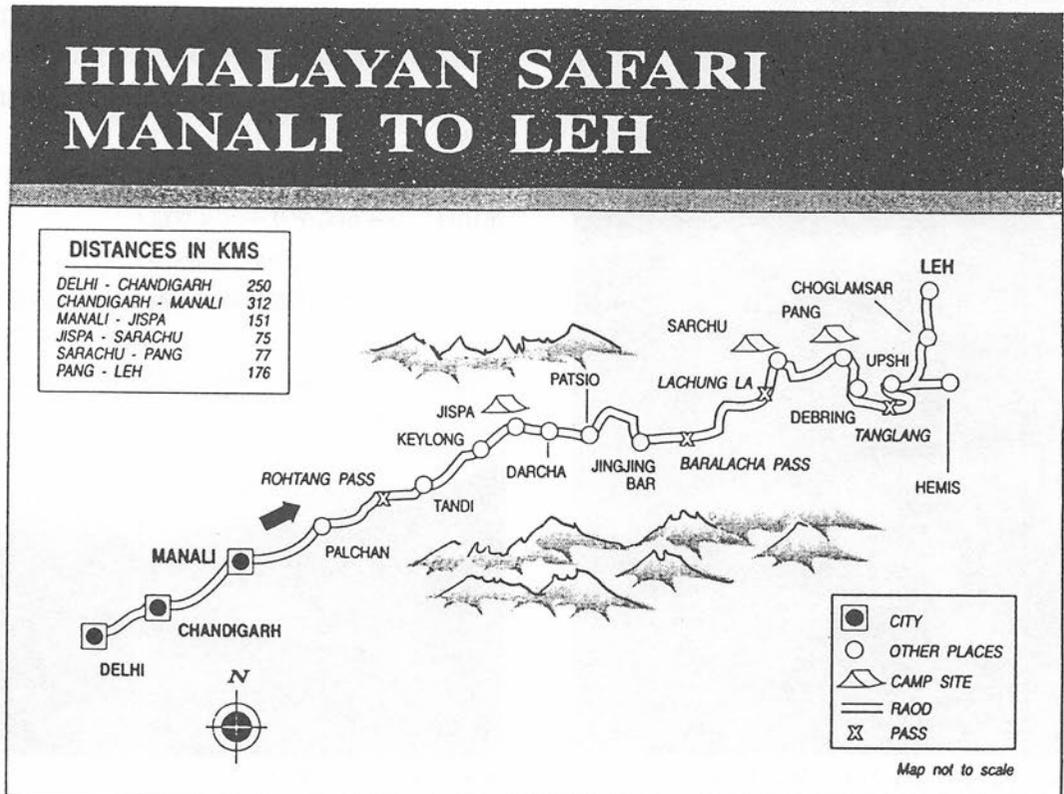
マナリから高度を上げ、ロータン峠(Rohtang Pasa)で休憩し、ダショハール湖(Dashohar)とベアス・クンド(Beas Kund)の池を訪ねる。

峠を下り、風が吹き抜けるコクサル(Khoksar)で昼食をとる。コクサルの標高は約3,140mである。

緑の多いオアシスのようなケイロン(Keylong)を通過し、ジスパに到着する。その夜はジスパにシーズン中のみオープンするテント村に泊まる。

第5日：ジスパからサルチューへ（ジープ）

午前中にサルチュー(Sarchu, 4,235m)まで行く。途中でバララチャ・ラ(Baralacha La, 4,891m)を越える。「バララチャ」とは「十字路の峠」の意である。この峠はガスカル、ラダック、スピティ、ラホルの境界が合するところである。



サルチューはヒマチュール・プラデーシュ州とジャンム・アンド・カシュミール州との境界の村である。ここには、ヒマラヤの高地民族と少数の兵隊が駐屯している。

サルチューでテントに泊まる。

第6日：サルチューからパングへ（ジープ）

朝、パング（Pang, 4,630m）へ向かう。

途中のラチュン・ラ（Lachlung La, 5,065m）あたりで昼食をとる。

夜、パングに着く。テントに泊まる。

第7日：パングからレーへ（ジープ）

朝、レーへ向かう。45kmも続く、広大なキュングシュー（Kyungshu）高原を通過する。「キュング」と呼ばれる羊に似た動物が見受けられる。

やがて、レー・マナリ道路の最高地点のダグラ
ン・ラ（Tanglang La, 5,359m）を越える。

レーに着いて、ホテルに泊まる。



▲緑のないチベットのような風景が続く

▼ダラング・ラ（5,359m）



第8日：レー（滞在）

朝食後、昔の夏の宮殿であったシェイ寺院（Shey）を訪ねる。ここには、約4mの高さの仏像がある。

丘の上にあるティクセ寺院（Thikse）からはレーの町やインダス川が見える。そして、この地方で最も大きくて、豪華なヘミス寺院（Hemis）を見学する。

レーに帰り、ホテルに泊まる。

第9日：レー（滞在）

フィヤン寺院（Phiyang）とスピトック寺院（Spitok）を訪ねる。昼食はレーのホテルでとり、午後は16世紀に建てられたレーの旧王宮と博物館を訪れる。

レーのホテルに泊まる。

第10日：レーからデリーへ（空路）

朝食後、空港へ向かい、国内便でデリーへ飛ぶ。デリーに着いて、国際便に乗り換え、帰国の途に着く。
（編著 沖允人）



▲モア高地（約5,000m）

地域ニュース

《ネパール》

新解禁あいつぐ

久しく沈黙を守っていたネパールでこのところ7,000m峰が解禁され話題を呼んでいる。

解禁されたのは、95年秋に東京農業大学が登頂に成功したカンチェンジュンガ山群のギヴィゲラ(トゥインズ・7,350m)。ネパール警察との合同によって許可されたもの。

次いで、チョー・オユーに隣接するパサン・ラム・チュリ(チョー・アウイ・7,354m)。95年秋に韓国隊がネパール側からトライし、86年に中国側から初登頂したH A Jのルートと合流したところで登頂を断念したという。

三つ目は、ベリヒマールはヒムルン・ヒマールの北西にある未踏峰ラトナ・チュリ(7,035m)に日本とネパールの合同隊が96年に登山予定である。この地域は技術的にはそう困難ではないが、未知の要素が充満しており、実現すれば楽しい山登りが期待される。

いずれにしても、一度開禁した山は引き続き他の登山者も入山できるようにしてもらいたいものである。

《インド》

シッキムのフルマラソン

ヒマラヤの雄大な景色を望み、インド北端のシッキム州を走るフルマラソンが、2年後から、42.195kmのフルマラソンになりそうだ。

95年11月の第5回大会に日本人として初参加した西一さんと、来日したインドの大会関係者が明らかにした。

現地は標高約3,600m。コースは未舗装で、素足の参加者も多いという。

記録を競う大会とは少々趣きが異なる。エコロジーとマラソンを組み合わせた「エコマラソン」を提唱している西さんらは、「フルマラソン化を

きっかけに、世界中の人々が交流できる場にした」と意気盛ん。

(1995・12・14 朝日新聞)

7,000m峰2つの初登頂

インドに残されていた2つの未踏峰がいずれもM. P. ヤダブが率いた登山隊によって相ついで初登頂された。まず、7月9日にチャウカンバⅡ(7,068m)がネルー登山学校隊の4名によって北東稜から登られた。10月23日には、アルナチャル・プラディシュのニュギェ・カンサン(7,050m)がIMF隊の5名によって北稜-北東稜から初登頂されたもの。詳細については次号にて。

《中国》

盛況続く中国登山

中国登山が相変わらず人気である。1995年に日本から中国に向かった日本隊は、下記のように18隊になった。この他にも偵察として入山した人もおり、中国登山はまだ盛況が続いている。

	山名	標高	派遣母体	人数	成否
1	チョモランマ	8848	日本大学	14	●/○
2	マカルー	8463	JAC	14	●/○
3	チョー・オユー	8201	ガイヤ	3	○
4	〃		法政大学	8	○
5	〃		秋田	13	○
6	シシャパンマC	8008	YMS	9	○
7	ニンチンカンサ	7191	栃木高体連	18	●
8	〃		福岡大学	?	?
9	ニエンチェンタンラIV	7048	中津川労山	9	◎
10	タンランボ	6394	中央大学	6	◎
11	チズⅡ	6200	大阪府岳連	37	◎
12	6,849m峰	6849	JAC青年	10	◎
13	チャクラギール	6727	福岡	7	×
14	カジセル	6525	立川女子高	14	◎
15	クタイケリケ	6488	山形県岳連	14	◎
16	ボゴダ	5445	栃木県岳連	10	○
17	〃		横浜	?	?
18	ミニヤ・コンカ	7556	北海道	9	搜索

※◎初登頂 ●初登攀 ○成功 ×不成功

《アフガニスタン》

パキスタンのアフガン難民

パキスタンに住むアフガニスタン難民の帰還問題が、反タリバン大統領派のイスラム復興勢力「タリバン」の攻勢で大きな転機を迎えようとしている。難民の多くはタリバンを支持しており、もし、タリバン政府樹立で一応の安定が回復されることになれば、かなりの難民の帰還が見込まれるからだ。しかし、内戦と和平の行方はなお流動的。

土で塗り固めた平屋建ての家屋が密集するペシャワール郊外の難民村カチャガリ（推定人口10万人）のほとんどすべての村民がタリバンを支持している。

パキスタンへのアフガン難民の流入は1978年に始まり、80年代のピーク時には300万人以上にも達した。イスラマバードの国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）パキスタン支所によると、95年前半までに推定で230万人がアフガンに帰還したが、なお約100万人がペシャワールや西部国境のクエッタに残留している。

タリバン・ペシャワール事務所のマルビ・アフマド・ジャン代表は「できる限り早く首都カブールを制圧し、純粋かつ真のイスラム国家を建設する方針である」ことを明らかにした。

また、パキスタン当局との関係については、「パキスタン当局は我々がここに住み、学び、アフガンとの間を自由に往来することを認めてくれている。それが最大の支援で、実利的な援助はない」と述べ武器援助を受けているとの見方を否定した。（1995.11.28 読売新聞）

ヒマラヤから

ナマステ！ いかがお過してしょか。

野沢井、小山は11月20日ジリからキャラバンを進め26日にルクラに着きました。ルクラでペンバ・ツェリンと会い、どの山に登るか相談しました。11月上旬の大雪のため予定したメラ・ピークは絶望的で、アイランド・ピークもかなり雪が残っているため、ロールワリンのバルチャモ（6,270m）

へ登ることにしました。コスモに許可を依頼し、キャラバンを開始しましたが、ターメ（3,800m）で雪が出始め、最奥の村テンヴォーまでラッセルとなりました。

12月4日BCを作り、5,300mにACを出しました。ラッセルがひどく大変疲れました。8日にアタックし登頂。バルチャモは通常テシラブチャ峠より北稜をたどるのですが、雪が深いため峠の手前から東面のクーロアールに入り登りました。思わぬバリエーションルートの登攀となりましたが、アイゼンがよく効いて快適でした。

2人とも元気にKTMに戻ってきました。これからランタンにトレッキングに行こうと考えています。帰国は1月の中旬になりそうです。

それではお元気でさようなら

14, Dec '95 バーバリアンクラブ 野沢井/小山

Books

サラ・シュワ初登頂 -1995年8月-

新しく開禁されたラダック南東部にある同峰を初登頂した足利工業大学隊の報告書。位置的にはレーとマナリの間にある。前々号で紹介したハリシュ・カパディアの記録は、ツォモリリ湖をはさんで対岸にある山である。

報告書は登山報告はもとより、食料、装備をはじめ、遭難対策や保険などEXPに必要な項目が詳細に報告されている。又、この地域の概説もあり、まだ15以上の未登峰が眠っているとかがれており、未知の地域に憧れる岳人必読の書である。

A4版130頁 カラー8頁 モノクロ16頁

〒326 足利市大前町268-1

足利工業大学山岳部（限定300部）

1月の東京集会

1月の東京集会は新年会です。新しい年の夢、抱負などを語らいながら、おいしい酒を飲みます。
日時 1月29日（月） 午後7時～会費千円
場所 HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋4番出口）

財政支援

寺沢善信/玲子 10万円 尾形好雄 5万円
林孝治 1万円

OBITUARIES (追悼)

チャールズ・エバンズ (Charles Evans)

英国登山家の先蹤者の1人、チャールズ・エバンズ氏が12月5日に亡くなった。享年77歳。死因は明らかにされていない。

1918年生まれのエバンズ氏は、オックスフォード大学で医学を修めたのちリバプールで外科医となる。イギリスやアルプスの山でトレーニングを積んだ後、第2次世界大戦中、軍医としてビルマ(現ミャンマー)やインドに配属されたことからヒマラヤに魅せられ、1952年春E・シプトンの率いるチョー・オユー登山隊に参加する。この隊は翌年に予定されたエベレスト登山隊員の訓練や装備のテストも兼ねていた。

翌53年、イギリスの第9次エベレスト登山隊に参加。5月26日に第1次アタック隊としてサウス・コルを出発してエベレスト南峰に到達した。ヒラリーとテンジンが最高峰に立ったのはその3日後である。

55年には自ら隊長となって世界第3位の高峰、カンチェンジュンガに挑み、初登頂を果たした。

その後、故郷ウェールズの大学学長に就任。69年にはナイトの称号が授与された。

ロープ結びのエバンス結びは氏の提唱になると云われる。

H A J 登山隊募集

ムスターグ・アタ (7,546 m)

現在、4名の申込者があり、隊が成立して準備を開始しました。

1. 期間: 1996年7月21日～8月25日(36日間)
2. 募集人員: 10名程度
3. 負担金: 85万円
4. 切り: 2月29日
5. 資料請求先: H A J 事務局

東京新聞の本

登山のオールラウンド情報誌



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

■第1特集

- 1月号★アイゼン、輪かん、スキータイプ別雪山山行
- 2月号 自然案内人と山を歩こう
山をもっと味わうために
- 3月号★全員集合/山スキーフリーク
- 4月号 自然の源・針葉樹と広葉樹、
照葉樹の森を歩く
- 5月号★GWに楽しむ山
雪稜・新緑そして花の山
北海道の山と人
- 6月号 日高、大雪、知床をめぐって
- 7月号★読者がつくる夏山プラン
ファミリー賛歌
- 8月号 湿原の山旅
地図で探したとっておきの池塘
私の好きな山小屋
- 9月号 近郊の山から北アルプスまで
- 10月号★HOW TO 紅葉の山を味わう
撮る、描く、遊ぶ
- 11月号 ローカル線の山旅
徹底ガイド付き
- 12月号 実践/雪山へのいざない
(入門編)

(★は特大号となります)

■特別企画

- 1月号 「僕でも登れる？」
——冬のハケ岳を楽しむ
- 2月号 「僕でも登れる？」
——アイスクライミングに挑戦
- 3月号 「僕でも登れる？」
——尾瀬で山岳スキーに開眼
- 4月号 「僕でも登れる？」
——これぞ岳人、春雪の西穂高岳へ(12回完結)
- 5月号 「アルプス・ツエルマツ研究」
- 6月号 「モンブラン一周トレッキング」
- 7月号 「花のアルプス・ハイキング」
- 8月号 「ドロミテの岩塔に遊ぶ」
- 9月号 「南米ロライマ山にロストワールドを訪ねる」
- 10月号 「ニュージーランド——手付かずの自然を楽しむ」
- 11月号 「海外トレックの王道・エベレスト街道を行く」
- 12月号 「冬の北米、アウトドアライフ最新事情」

東京新聞出版局 (中日新聞 東京本社) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

4-1 アルチン(アル金・Altun)

- * 山脈: アル金山脈。東アル山脈の最高峰。
- * 位置: 蘭州(1,157m)の北西約946km。敦煌の南西約127km [39° 03' N, 93° 07' E]
- * アプローチ: 蘭州經由敦煌まで飛行機便。敦煌(1,138m)からジープで約10時間で南面BC(3,640m)に到着する。
- * ルートの所要日数: 89年秋田隊は、実質9日で登頂。
- * 山の概念: 主峰5,798m。
- * 通常の登山期間: 7月~8月の夏期。
- * 山名: 蒙古語で柏の樹が有る山の意。
- * 小史: 無し。
- * 参考文献: 秘峰アルチン山 [秋田魁新報社・A K T テレビ 1989年12月刊]

登山の概要

主峰(5,798m)
1989年

4-2 キレン(祁連・Qilian)

- * 山脈: 祁連山脈。
- * 位置: 蘭州(1,157m)の北西約578km。酒泉の南約33km [39° 20' N, 98° 50' E]
- * アプローチ: 蘭州から列車で酒泉(1,477m)まで18時間。酒泉から水管所まではバス。ここからトラックで2,700mの大草灘までは酒泉から一日行程。ここからBCとなる大海子(3,360m)まではヤクを使用して輸送。
- * ルートの所要日数: 85年JAC隊は、実質8日で登頂。
- * 山の概念: 主峰5,547mは素珠鏈(スーチュリアン Sizhulian)と呼ばれる。
- * 通常の登山時期: 7月~8月の夏期。
- * 山名: フンドの言葉で天を意味する。
- * 小史: 無し。
- * 参考文献: 日本山岳会中国登山隊1985報告書 [日本山岳会中国登山隊 1985年12月刊]

8月~9月 南面 日中合同登山隊

8月8日南面サムサク谷出合いから2km入った3,640mにBC設営。11号氷河に入り14日5,000mにC1。北岩稜から19日に丸山、馮、宛、伊藤、大友(博)、小田嶋、渡部、沢田、石、岡部(勝)、大友、岡部(幸)の11名が初登頂に成功。翌日も第一次の2名を含む日本人4名が登頂した。

[日本側隊長: 平沢健治(51) 丸山芳雄(50) 小田嶋秀夫(42) 中川広三郎(44) 伊藤清春(38) 土肥貞之(39) 奥州由佳子(31) 工藤多鶴子(29) 浅妻みゆき(33) 鎌田勇雄(61) 大友博和(36) 斎藤哲美(54) 和田清治(60) 岡部幸雄(37) 池田恭悦(42) 鈴木幸雄(55) 渡部克宏(27) 山谷直樹(21) 沢田石順(26) 石井仁(41) 報道=大友直(26) 岡部勝(43)]

[中国側隊長: 洪復興 楊徳有 李念傑 馮政権 宛学峰 李肅笛]

登山の概要

主峰(5,547m)
1985年

7月~8月 北面 日本山岳会隊

7月31日北東の大海子3,360mにBC設営。ヤンロン氷河から5,422mピーク手前にC1。8日磯野、馬場、目黒の3名が初登頂に成功。9日にも7名が登頂した。

[隊長: 磯野剛太(31) 鹿野勝彦(42) 山下六郎(33) 森本志天(28) 小池英雄(26) 馬場哲也(25) 熊崎和宏(23) 山内智晴(23) 鈴木雅晴(21) 金井隆男(21) 目黒義和(20) 報道=神長幹雄(35) 柳木昭信]

1988年

7月~8月 北面 福島高校隊

8月7日北面4,030mの氷河舌端を望む所にBC設営。当初は南面を予定したが、降雨



による増水ため断念。北稜上にC 2。13日に本田、桃井、堀江、高橋(通)の4名が登頂。

[隊長：加藤隆(57) 大谷司(44) 石原和男(41) 河野作太郎(41) 佐藤有(34) 高橋道夫(33) 亀岡友博(31) 木下晃一(31) 武藤伸彦(30) 高橋正男(29) 安田信二(29) 桃井伸緒(28) 堀江誠克己(24) 本田伸良(23)]

[西望祁連]

1989年

4-3 キレン山脈その他の山々

キレン山脈は、幾つもの山系に分かれているが、大きく分けると西から党河南山(5,665m)、喀克吐蒙克(5,651m)、大雪山(5,483m)、托来南山(5,382m)、疏勒南山(5,808m)、托来山(5,022m)、走廊南山(5,547m)、冷竜嶺(5,254m)などである。

* 鏡鉄山(5,205m)

托来山山系の北西にある山。偵察した結果気候はミニヤ・コンカに似ていることが分かり、登山

7月～8月 北面 秋田アルパインC隊

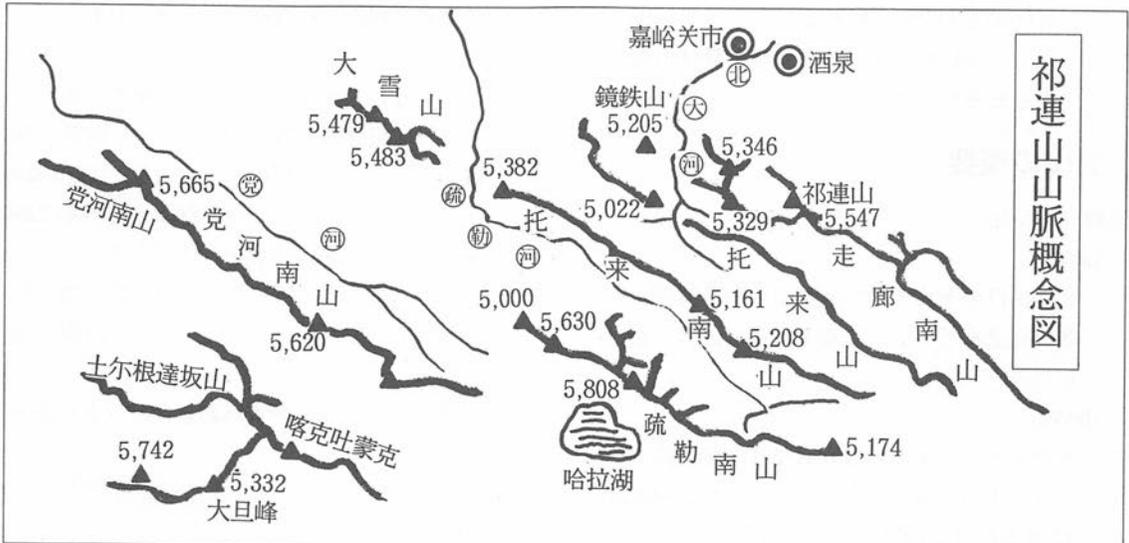
7月29日4,100mにBC設営。不調者続出したため、8月3日4,900mに到達したのを最後に登頂を断念した。尚、福田隊長は下山した後に、酒泉で病死した。

[隊長：福田文二(60) 小玉紘策(48) 北林嘉鶴子(67) 柳田勇悦(40) 成田耕造(40) 石井清人(35) 長谷川覚(28) 伊藤雅天(23)]

に適しているのは4月～7月である。1958年5月3日、許競、劉大義、劉連満、彭淑力、張俊岩と地質部門6名は頂上アタック。頂上へ至る最後の200mは、強風のため雪が飛ばされて青氷が出ていて難渋したが、全員が登頂に成功した。

* 鏡鉄山七一氷河主峰(5,120m)

中国は1959年に予定されている、旧ソ連とのチョモランマ合同登山を成功させるために、58年に大々的な登山訓練を行った。香山で机上訓練を終えた



90名（内6名は女性）は、太白山で訓練し、史占春に率いられて56名が鏡鉄山の北面にある七一氷にやって来た。8月8日3,700mにBC設営。氷河舌端の4,250mにキャンプを出し、10日に49名が5,120m峰にアタック。途中高山病のため4名が脱落したが、残る45名（内女性4名）が登頂に成功。脱落した4名も13日に登頂した。

* 疏勒山主峰（5,808m）

中国科学院が組織した祁連山脈の水源調査から

4-4 シンチン（新青・Xinqin）

* 山脈：崑崙山脈。

* 位置：西寧（2,261m）の西約952km。ゴルムドの西約352km [36° 00' N, 90° 09' E]

* アプローチ：西寧からジープでゴルムド（2,807m）までには2日間。ここからさらにチベットへ南下して崑崙山口（4,772m）を越え4日間で西面のBCに到達する。但し、夏期は増水などのため難渋する。

* ルートの所要日数：92年HAJ隊は、BC設営後14日間で登頂。

* 山の概念：主峰6,860mを筆頭に6,000m峰が約30座ある。主峰は青海省の最高峰。

* 通常の登山時期：4月～6月の春期。夏期には増水のため川の徒渉が困難であり、3月にはまだ雪が残りジープで入山出来ない。

* 山名：現在の新青は、新疆と青海の省境にあるために付けられた名称。別称にブカ・ダバン(Buka Daban)があるが、ウイグル語で野牛の嶺の意。またモノマハと呼ばれることもあるが、これはロシア皇帝の帽子の意。

登山の概要

主峰（6,860m）

1987年

8月1日小玉ら3名が偵察のため不凍泉から2日間進んだが、川に阻まれBC入りを断念した。

1988年

4月～6月 東面 日本ヒマラヤ協会隊

5月1日ゴルムドを出発し、6日18峰基部4,930mにBC設営。16日に18峰（6,237m）

香山で訓練している登山隊に参加要請があり、15名が派遣された。疏勒山は祁連山脈の最高峰である。調査終了後の9月17日に許競、崔之久、変学富、王風祥ら9名が初登頂に成功した。尚、中国登山運動史では標高を6,305mとしている。

* 党河南山（5,665m）

伊東享ら15名の大分連隊が、1994年8月11日にBCを設営し、19日と20日に8名が登頂した。

南稜から福山、小玉、峯岸、増田、三浦の5名が18峰に初登頂したが、主峰は断念した。

[隊長：植松秀之(48) 福山侑(44) 尾鷲和也(28) 森山英穂(32) 小玉義広(30) 峯岸一(30) 増田隆(27) 三浦誠(21)]

[遥かなる新青峰への道（ヒマラヤ201号）]

1989年

4月～6月 東面 京都山岳会隊

クーラ・カンリの計画であったが、チベット動乱のため転進。4月24日ゴルムドを出発。27日2峰と5峰から続く氷河の出合4,800mにBC設営。ルートを氷河上にのぼし26日15峰の基部5,900mにC3設営。27日6,170mに到達したのが最高到達点となった。

[隊長：遠藤京子(51) 宮川清明(48) 上野佳一(50) 小原博(40) 戎谷初恵(32) 木田伸一(27) 近藤晃(53)]

[崑崙の秘峰 新青峰 1990年9月刊]

1992年

4月～6月 東面 日本ヒマラヤ協会隊

5月4日18峰基部4,900mにBC設営。南稜から7峰と2峰間の氷河に入り、17日6,350mにC2を出し18日増田、林本の2名が2峰を経由して主峰の初登頂に成功した。

[隊長：福山侑(48) 坂上利明(37) 増田隆(31) 中田和良(41) 林本章(28) 城田陽一郎(23)]

[青海省最高峰 新青峰初登頂記（ヒマラヤ250号）]

II峰（6,783m）

1989年

5月 アメリカ隊

HAJ隊の下山と入れ替わりに入山。2峰を目指したが寒気と強風のため6,400mで登頂を断念した。

[隊長：ピーター・キルカ、エリック・ペリマン(37) リック・リッジウェイ、フィル・トリンプル、ビル・ラール、フィル・ペラルタ＝ラモス、

ルス・フォール＝ブラック、デーヴ・チック・エドワード・ベイル、ジョージ・スミス、フランク・キャストル、ノーマン・トンプソン、トニー・ワトキンス、アレックス・ホーペ、カテ・ホーペ、フランク・ウエート、パウル・タム、ジム・ベネット、ベアリー・メイヤー、ロブ・リクロフト]

[山と溪谷639号 モン・ブラン物語(吉沢一郎)]

4-5 グラタンドン(冬拉丹東・Geladaindong)

*山脈：唐古拉山脈

*位置：ゴルムド(2,807m)の南西約479km。ラサの北約402km [33° 50' N, 91° 00' E]

*アプローチ：西寧(2,261m)からゴルムドまではジープで2日間。南下し崑崙山口を越えて雁石坪の先から青蔵公路を離れて西に入り、ゴルムドから3日間でガルチューの5,280mがBCとなる。

*ルートの所要日数：85年唐古拉山脈登山隊は実質14日間で登頂。

*山の概念：主峰6,621m。周辺に6,000m峰が多数座ある。

*通常の登山期間：7月～8月の夏期。

*山名：チベット語で「高く尖った山」の意。

*小史：1890年1月にフランス人がガブリエル・ボンヴァロが北から南に抜けた。

*参考文献：遙かなる揚子江源流 [唐古拉山脈学術登山隊 1987年5月刊] 青蔵No.2 [青蔵高原研究会 1985年6月刊]

1985年

7月～8月 北西稜 唐古拉登山隊

8月6日ガルチューの5,280mにBC設営。13日北西稜直下6,100mにC2設営。19日高尾、川下、倉智、下田、小林、広瀬の6名が初登頂に成功した。尚、北西稜のコルを挟んでたつ6,293m峰に15日高尾ら6名が初登頂し、18日にも2名が登頂した。

[隊長：松本征夫(56) 西田民雄(42) 松原正毅(43) 倉智清司(35) 高尾薫(38) 川下肇(32) 坂本勉(28) 黒木一男(37) 下田泰義(34) 田淵卓弥(27) 松本佳久(25) 小林正寛(23) 廣瀬顕(22) 陶山昭子(43) 報道＝宮前周司(32) 鈴木幸夫(30) 藤巻弘(47) 松原英夫(27)]

1994年

7月～8月 北西稜 北京大学隊

7月30日ガルチューの5,280mにBC設営。6,100mにC2を出し、8月5日に6名、7日に5名が登頂した。

[張為、肅立、蘇毅ら15名]

[山野 1995年1月号]

登山の概要

主峰(6,621m)

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(高地アジア含む)の各地域の社会情勢・現地事情(入山事情)の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅 etc.....

ヒマラヤ及び高地アジアに関する地域なら何でも結構です。“記録”だけではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6～8枚程度、写真3～5枚、横書きでお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。

またヒマラヤ地域へ出かけられる方、計画書をご送付下さい。各方面からの問い合わせ用に使用します。

★ 投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

★ 送り先 〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7 萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会機関誌編集部

TEL 03 (3988) 8474

FAX 03 (3988) 8502

■ 寸 感 ■

23年ぶりにソウルを訪れた。街並みの変わりよ
うと同じく近年韓国岳人のヒマラヤでの活動には
目をみはるものがある。会場には韓国全域からヒ
マラヤニストが参集したが、若い岳人が多いのに
驚いた。その中の一人である嚴弘吉君は、今年
(95年) 8千メートル峰のハット・トリックに成
功し、5座に6度登頂した。来年は5座を登る計
画だと話してくれた。あまりのすさまじさに、御
一緒した大西保さんと、「急がないように！」と
お願いした。(山森)

事務局日誌 (12月)

- 2日(土) ヌン隊、労山隊近藤隊長と協議(於
ルーム、酒井、樋上、山森)
5日(火) ヌン隊打ち合せ(酒井、中川、牧野)
7日(木) 都岳連シベリア社行会(遠藤)
8日(金) ヒマラヤ290号発送
11日(月) ムスターグ・アタ決定通知書(4名)
12日(火)～13日(水) 韓国ヒマラヤン・クラ

ブ(ソウル)訪問(山森)

- 14日(木) 海外登山女性懇談会(尾形、寺沢)
15日(金) プラブーツ懇談会(労山、山森、中川)
18日(月) スポニチ登山学校祝賀会(於前橋、
遠藤、八木原、尾形)
21日(木) 労山報告会兼望年会(於エミール、
山森、尾形、中川)
25日(金) HA J忘年会(18名)
26日～1月5日 事務局休暇

ヒマラヤ No.291 (2月号)

平成8年1月10日印刷 8年2月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

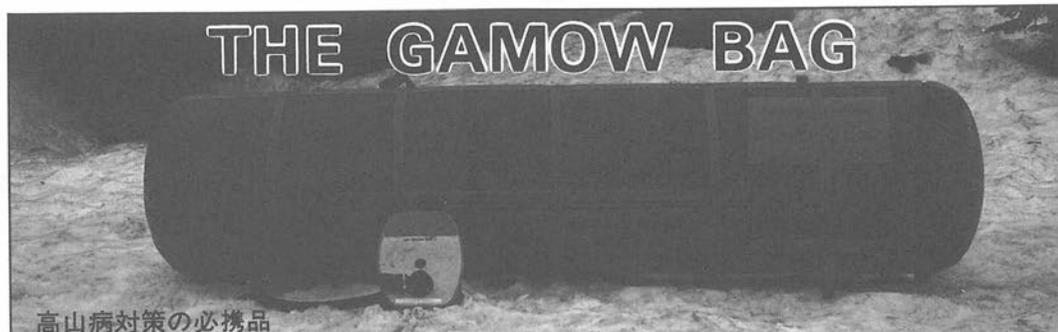
発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必需品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、
高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたを
そろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店 / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店 / 〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店 / 〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店 / 〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店 / 〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブルーカド / 〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブルーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店 / 〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店 / 〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店 / 〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店 / 〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店 / 〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店 / 〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー) / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所 / 〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004